

[日時]

2016 年 6 月 10 日 (金)

[司会・進行]

中江研 (准教授)

[担当学生]

湊大地 奥田浩平 家入健 岡野さくら 後藤沙羅 馬場智美
吉澤賢 (M1) 佐藤拓巳 (B2) 荒木佑介 梅原きよみ 楠橋諒ノ助
向上沙希 齊藤潤 硯愛画 初山美帆 吉本美春 (B1)

神戸建築学 第 39 回

「エリアリノベーション / 計画的都市から工作的都市へ」

馬場 正尊 建築家 / Open A 代表 / 東京 R 不動産ディレクター / 東北芸術工科大学教授

講演概要

都市は現在、ある分岐点に立っている。戦後、高度経済成長や人口の増大の中で生み出された日本で作られた建築物の多くは国や大企業の均質な資本によって生み出された均質な建築物である。それら均質な建物は日本に均質な都市風景をもたらした。経済成長も落ち着き、人口が減少へと転じた現在、それらの建築物には老朽化や空き家が目立つようになってきた。馬場氏は計画的都市から工作的都市への移行が生じると話した。近代の建築手法として、建築家や施主が計画し、ゼネコンや工務店がそれを建造する。そして最終的に使い手に渡するというプロセスが存在した。現代、そしてこれからの建築手法のプロセスは近代までの流れに逆行する。建築に対して、大工やアーティスト、住民など多種多様な介入が生じることによって、使い手からむしろ計画、建造にいたるまで建築に参加していくのではないだろうか。

前述の通り、馬場氏はこのような新しいプロセスで構成される都市を工作的な都市という。既存の古い建造物にはリノベーションという手を加えてゆく。建築は月日とともに物語を持つ。元の住人や従業員といった使用者が紡ぎだしてきた物語は建築にさらなる深みをもたらす、建築は使用者に寄り添っていく。そしてリノベーションされる時、その物語は完全には潰えず、どこかその形を残しながら新しい物語を紡いでゆく。新たな使い手を「工作的な人々」と馬場氏は称しており、彼らは空間を、彼ら自身の行動や生活に合わせて再編成、再構成していくという。既存の空間の中に新しい違和感を構成しつつも、前の使い手の熱をどこかに残して彼らは住み継いでいく。馬場氏はそうしたことが連なる

ことで、戦後の日本を支えてきた、言わば個性のない均質な都市を新しい都市の風景としてアウトプットしていけるのだという。

働き方というのも常に変化し続ける存在である。機械やロボットが人間に代わって作業するようになり、自分たちの働き方は labor (作業) から work へ、そして play へと変貌しつつある。仕事が変わるとそれに合わせて生活も変化していくことであろう。第 1 次、第 2 次、第 3 次産業の、そして住居の区分をなくし、それらを一体化していく。それぞれの役割が融合、統合していくことが工作的都市では可能となる。馬場氏が注目するワードの 1 つに「メディア」がある。彼は大学時代、自らが手がけた雑誌「A」の編集長のほかに博報堂で編集長の経験を通してメディアが持つ力を感じてきた。そのことは氏の著書の中でも多々触れられていることで、東京 R 不動産のホームページは実にビジュアルに富んでいる。メディアの力は人と建築を結びつけることもできるが、同時に建築そのものを破壊しうる力を持ったものでもある。部分と部分が繋がって面になるように、このような試みが随所で行われやがて地域全体に広がる。不動産、建築、メディア、デザインが密接にかかわりあう 4 環構造であることを示した。4 つが連携することで、地域と、そして建築と人が繋がることができると氏は話す。

最後に馬場氏は形容詞の建築について語った。既存の何か目的のある名詞でできた建築から、つい何かをしてしまう、したくなる空間、つまり何か曖昧な形容詞であらわされる建築を目指しているという。馬場氏が目指す新しい空間構成には期待があふれるばかりである。



馬場 正尊 | Masataka Baba

建築家 / Open A 代表 / 東京 R 不動産ディレクター /
東北芸術工科大学教授。

1968 年佐賀県生まれ。1994 年早稲田大学大学院建築学科修了。博報堂で博覧会やショールームの企画などに従事。その後早稲田大学博士課程に復学。雑誌『A』の編集長を経て、2003 年 Open A Ltd. を設立。建築設計、都市計画、執筆などを行う。同時期に「東京 R 不動産」を始める。2008 年より東北芸術工科大学准教授、2016 年より同大学教授。建築の近作として「TABLOID」(2010)、「観月橋団地」(2012)、「道頓堀各座」(2013) など。近著は『RePUBLIC 公共空間のリノベーション』(学芸出版社、2013)、PUBLIC DESIGN 新しい公共空間のつくりかた』(学芸出版社、2015)

私たち第39回神戸建築学実行委員会は、講演会の2ヶ月ほど前から馬場正尊さんの事前学習を進めてきました。その中で学んだものと、講演会の内容をリンクさせながら、馬場さんのヴィジョン、見方に対して私たちが考えたことを今回、吉澤がまとめ、述べさせていただきます。

今回の講演では、大学生に対して強いメッセージが込められているように私は感じました。例えば、講演会の内容にあった大阪の「北浜テラス」では、公共空間と私有空間とを結びつける一見突飛なものでも、合法であるといえるエピソードは、既成の概念にとらわれがちな今の学生に対して、少し違う視点を与えてくれているような気がしました。他にも、馬場さんは大学時代に同人誌を作っておられ、それが雑誌『A』となったことや、馬場さんの先生である石山修武氏のお話など、それらは大学時代の経験が社会人になっての活動の土台や、理論の根本になっているということを私たちに伝えてくれているような気がしました。

また、講演会後の質疑応答では、人口減少による都市の取捨選択、情報化社会における建築のあり方など、現在の社会やシステムが抱える問題点に対する解決策、提案を馬場さんに求めるような質問がありました。その質問に対して馬場さんは、それらの問題点を自らも非常に重要な問題として捉えているとした上で、結論ではないが、この国の都市は取捨選択の時代に陥らざるを得ないこと、また、情報化社会といっても結局建築はface to faceで人と人が会う空間であり、そこで、合理性では語りえない、ついつい何かをしてしまうデザインが重要になってくるだろうと答えておられました。この内容について私は、都市が「計画的都市」から「工作的都市」になっていくなかで、自らが主体となって動くことのできる時代、逆に動かなければどんどん置いていかれる時代になっていくというメッセージ性が込められていたのではないかと感じています。

一つ、講演会の内容に関して疑問に思ったことがあるとすれば、それは団地のリノベーションについてです。馬場さんの考えるリノベーション、それは、あえて内部を完全に完成させず、利用者自身に空間を作る余地を残すことで、より人の持つクリエイ



ティブな部分を引き出すというもので、その手法に関しては、非常に面白く、目新しい価値があることだと感じました。しかし一方で、実現しているものを見ると、リノベーション後の団地の利用者はアーティストなどクリエイティブな人の層が大半を占めており、一般の人にはその価値を伝えることができていないのではないだろうかと感じました。やはり、どんなに素晴らしいものを作っても、それをより多くの人に伝えることができれば、社会自体を改善することはできず、都市全体をより良いものにすることは難しいのではないかと私は思います。

最後に、今回のテーマである「エリアリノベーション」は、現代で重要視されている「持続的社会」の実現に貢献できるものだと私は感じました。戦後の日本の成長都市時代は今や終止符を打ち、人口減少が目立つ現代では人よりも建物の数の方が多くなり、その余った建物をどのように活用し、そして、これからの都市をどのように維持管理をしていくべきかという問題が浮上しています。そのような時代の中で、馬場さんの考えるエリアを絞ったりリノベーションまちづくりは、そのエリア内の住民が自分の町に対して誇りをもち、持続的都市作りが行われていく一つのきっかけになりえるものだと私は感じました。また、人口の流動性が高い現代では、その地域に住む魅力というものが必要不可欠だと私は考えています。その魅力を生む一つの手法としてリノベーションは効果的な手段であると感じるとともに、活発なエリアを作り、持続的なまちづくりを成しえる可能性を秘めていると私は感じました。(吉澤賢)

